

オマーン、若者たちの今



住友商事株式会社マスカット事務所長 近藤 立弥

1970年にカブース国王が即位されてから、道路、発電、空港、港、宅地、学校、病院、モスクなど国に必要なすべての施設が建設整備され、油ガス資源の輸出と相まって国は大幅に発展、人々の生活も豊かになった。オマーンの国土面積は日本の85%（約31万 km²）、総人口520万人に占めるオマーン人は約290万。国土の8割程が土漠、砂漠、2割弱が平地と山岳部である。海岸線の総延長は3,500kmと長く、古くから海洋交易が盛んであった。

豊かになった今、次世代を担う若者たちはこの国の未来をどう見ているのかをテーマに書きたいと思う。



(出所) 外務省ウェブサイト

1970年から建設が開始され半世紀が経過した今、国の道路全長は35,500kmとなり、首都マスカットから西のUAE国境まで250km、南のイエメン国境までの1,100kmはすべて高速道路で繋がり、各地へ車で簡単に移動できるようになった。観光施設や歴史的建造物の修復、豊かな自然を活かした新たな観光スポットが毎月のようにオープンされている。運転免許や住民票など政府関係許認可もほとんどがデジタル化され、スーパーの支払いで現金を使うこともほとんどなくなった。

若者たちの声を広く集めようと、当地の同業者や同僚に協力して貰い、20～30代の学生、社会人、家族、友人などに4つの質問を投げかけてみた。

- ① インフラ整備により生活はどのように変わったか。
- ② ツーリズムの発展をどう思うか。
- ③ 将来に向けたビジネスは何か。
- ④ 日本のビジネスや文化をどう思うか。また、日本がオマーンに貢献できることは何か。

若い世代といっても様々で、最高学府の大学院生、就職浪人、国営企業の社会人、地方で家業手伝いする者と様々故、さぞ回答もバラバラであろうと思っていたところ、さにあらず、意外にも共通した部分の多い答えが返ってきた。

筆者紹介

1990年住友商事入社、物流インフラ事業本部所属、2008年マダガスカル鉱山プロジェクト従事、2010年よりイギリス駐在、欧ア中東ロシア総支配人付兼ドイツ物流事業会社社長、2017年よりインド駐在物流／インフラ部長、2023年7月よりオマーン駐在。

- ① インフラ整備：舗装された陸路が東西南北に繋がったことで人や物の動きが格段に活発になり、観光、通勤、食材の流通が未舗装時代と比較して5～10倍の効果があると感じる。空港については国際空港の拡充により中東域内はもちろん、Expat（出稼ぎ労働者）の多いバングラデッシュ、パキスタン、インド、欧州全域へのアクセスが増え、ビジネスや観光の往来も増加し、海外にも出やすくなったとの意見が大半を占めた。公共交通機関はタクシーか、本数も停留所も決して多いとは言えないバスしかない当地では、自家用車での移動が大半を占めていることもあり、高速道路の整備はモータリゼーションを一気に進め、地方都市から首都、地方の都市から都市への移動を容易にし、一人1台車を持って片道100km以上の通勤を1時間でできるようになった。陸路での物流アクセスも容易になり、UAEからの輸送は半日で可能になり、一般消費材の購入は飛躍的に選択肢が広がった。

道路建設は先代のカブース国王の功績として讃えられている。国王が自らハンドルを握り、国内を陸路で移動し国民と直接対話をする「Meet the people」は各地の抱えるインフラ整備の問題を短期間で国



東西を走るスルタンカブースハイウェイ



マトラ市街に向かう一般道



マスカット国際空港



ロイヤルオペラハウス



スルタンカブースグランドモスク

王が確認し、即決で建設を開始したことは熱狂をもって受け入れられた。こどもの頃自分の住む地域に国王が来られ、沿道で見た者、直接対話の席に父親に抱かれて参加した者はかつての体験を昨日のこのように熱く語っていた。4年前に亡くなられた今でも敬愛の念をもって、対話の内容が語り継がれている。現ハイサム国王のもと、鉄道輸送網の整備が開始されている。貨物鉄道より通勤に使えるメトロや比較的高額の飛行機にとって代わる長距離移動手段としての電車利用を求める声が大半を占めた。

- ② 観光：オマーンは自然、歴史、文化を大切に継承しており、人工的でなく自然と調和した観光地の開発を行っていることは回答者の多くが大変良いとしている。インバウンドの旅行者は1,100万人を超え、緑の少ない中東には珍しく、7～9月には南部サララは雨が続き、緑の山々に滝や川、池も現れ、また山岳部では気温も下がることから国内外から旅行者が訪れる。2,000m級の山脈、3,000m級の最高峰も道路、登山道の整備、リゾートホテルの開発が行われている。

オマーンは日本がかつてそうであったように、3世代が同じ敷地や近接して暮らす大家族が多いことから、季節毎の旅行も10人、20人といった単位で出掛けている。道路インフラ整備も相まって、ラマダン明けの休暇、学校が休みのシーズンは車を連れ、家族で大移動をする。ここ数年はキャンプがブームで、観光地のみならず景観の良い場所にはキャンプサイトが無料で提供されている点も老若男女問わず人気が出ているとのコメントもあった。自然も良いが、若い世代にとってはドバイのような場所は数々のアトラクション、圧倒的な品揃えのモール、常に新しい何かが発見できるという点で魅力的で、オマー



ビディア砂漠



ワカン (2,000m 超の山脈の眺望)



夏の南部サララ



サララ (夏の時期には滝も出現)



マスカットの夕日



温泉も全国に300箇所

ンにはこういった部分が不足しているという意見も。リピーターを増やす意味でもアイコンとなるテーマパーク（日本で言う TDL/TDS、USJ と言ったところか）のニーズを語る若者もいた。

- ③ 将来に向けたビジネス機会：再エネを利用したグリーン水素、バイオ燃料、脱炭素社会に向けた取り組みは「オマーンビジョン2040」の目玉の一つであり、弊社が支援している奨学制度でも大半の学生が新エネルギー科学の大学院を目指している。多くを海外の資金と技術に頼り、これの活用についても製造業が国内で十分に育っていないため、マネタイズするまでの時間軸に不安視する声が多く聞かれた。DX 関連事業への興味も強く、EC、Fintech 分野の需要に注目しているものの、スタートアップに対しての国の支援を強化して欲しいとの声が多かった。

オマーンの失業率は3.3%との発表がある一方、最高学府を卒業しても就職ができない、大学院を出ると初任給が上がるため採用を渋られる、政府機関および政府系企業は狭き門でコネクションを持っていないと一般応募では難しいなど、実際若年層の就職率は公表値よりも低いと思われ、若者たちも就職難を肌で感じている模様。政府は30超の職業につき Expat の新規ビザを半年停止すると最近発表し、オマーン自国民に門戸を開放したが、これも上記の肌感と重なる部分がある。一方、若者の多くは現場仕事は好まず、海外からの労働力を使って事業活動を行い、事業主、マネージメントの立場に就職希望が集中している。伝統的な油ガスの分野では現場も解る人材が育っていると思われるが、その他の製造分野ではエンジニアの不足を認めるものの自身ではやりたくない、どうやったら良いか解らないという本音が見え隠れした。

- ④ 日本のビジネス、文化への印象および将来への期待：当地進出の日系企業は決して多くないものの、他者への敬意や協力、調和、勤勉、弛まぬ改善に対しての賞賛の声が聞かれ、歴史的な関係（タイムール国王は退位後に日本人女性と結婚し、現在も日本人の血を引く王女が存命していること）も相まって親近感を持っている。オマーンも他者への敬意、協調を重んじる文化にて親和性を感じていると思われる。

- タイムール国王（1913～32）
- サイド国王（1932～70）
- カブース国王（1970～2020）
- ハイサム国王（現）（2020～）

官民含め日本への期待については異口同音に新たな技術とモノづくりを「教えて欲しい」との意見。現在進行している再エネ、水素、脱炭素関連事業の投資についてオマーンは消費者であり購入者で、自ら現場で汗を流して事業を立ち上げたくともそのスキルが不足していることを痛感しているのではないかと。日本の製造業は裾野が広く、原料加工から中間材、完成品に至る様々の分野を自らの手で作り上げており、経営層も製造現場の1から10まで熟知している。文化的にもシンパシーを感じていることもあり、自分たちに教えて欲しいとの熱いメッセージを多くいただいた。

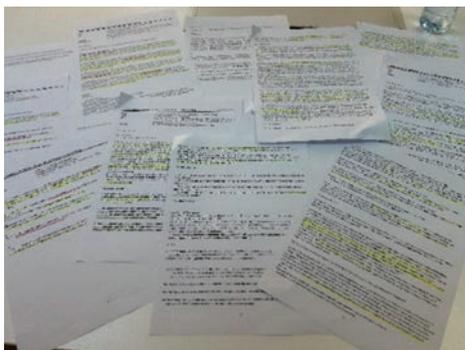
オマーンに来て1年3カ月。国外出張にも出ず、でき得る限りの時間を使って油ガス、鉱物、製造、物流、農業、水産、観光の現場を回り、オマーンの人々と議論をし、好きな所も嫌いな所も少しずつ見えて来た気がしている。当地で各社が取り組む事業投資も無論国に資するが、各分野における地道な教育分野は日本国

として大いに貢献できる分野なのではないかを感じる次第である。微力ながら、オマーンと日本の架け橋の一助となるべく全力で取り組んで行く所存。

最後に今回若者からの本音を聞き出すために協力して下さったオマーンの皆さま、同業の駐在員の方々、弊社社員一同およびご家族には心よりお礼申し上げます。



ルスタクでの祭りの一コマ



オマーンの皆さんからいただいた意見の数々



一般的なオマーン人男性の衣装

注：写真はすべて筆者撮影。

